

滋賀詩集

An Anthology
of
the Poets' School



滋 賀 詩 集



近 江 詩 人 会

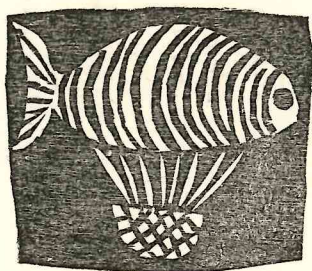
目次

湖上の雪	あのととき	六月の比叡の朝	南国古調	旗はいつまで黒いのであろうか	夜の谷間	足	神話	ある情景	夜の海	二十世紀の獅子	死の背後から	国立療養所	月と河童と	色彩の相違	波	石について	僕の抒情詩	早春の朝に	ねが	拝所
他一篇	他二篇	他二篇	他三篇	他一篇	他三篇	他二篇	他一篇	他一篇	他二篇	他三篇	他一篇	他一篇	他二篇	他一篇	他二篇	他二篇	八篇	他二篇	他一篇	他二篇
清水秀暢	沢柳太郎	佐藤寿恵子	小林英俊	久古尚	木村三千子	北川清次郎	河村純一	奥地憲二	尾形圭一	大原謙三	大野新	大西作平	宇田良子	岩崎寿雄	岩崎昭弥	猪野健治	井上多喜三郎	井上源一郎	池田千代子	井伊文子
25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5

後記

忘却	村却	川鱒	山脈暮景	山のサン	夜の声	涙の長	夜のとき	ひととき	夜の鉄路	ひめくり	馬上盃	虫の歌	実現こそすべてである	赤い月	ホワイトシャツ	冬の眠	山椒魚	死者とそして音のない口笛
他三篇	他二篇	他一篇	他一篇	他一篇	他一篇	他二篇	他三篇	他三篇	他一篇	他二篇	他一篇	他二篇	他一篇	他一篇	他三篇	他二篇	他二篇	他三篇

杉本長夫	鈴木敏	鈴木寅藏	田井中弘	高橋輝雄	武田克己	田中	谷川文子	中川定雄	中川いつじ	中村光樹	西川勇	錦織白羊	野田理一	久沢俊子	藤井陽子	藤野一雄	冬木好	村ひさし	八木祐彦
26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45



拝所

拝所の森では
木の葉を落しながら
小鳥たちが嬉嬉と遊んでゐた

獄の神は
こよなく平和を愛したまふたのに
その神の住家を奪って
焼けただれた鉄が居坐り
冷酷にひえて……

ああ 神よ
いづこを飛行したまふや。

井伊文子

血の痛みを

インデイゴの黒潮が
ひりひりと珊瑚礁の皮膚にしみる
かんかちの補装路を
無理矢理 バックボーンにもたされた島の
呻きがきこえる。

傷深いうるまの島の痛みは
私の血の 限らない痛みである。

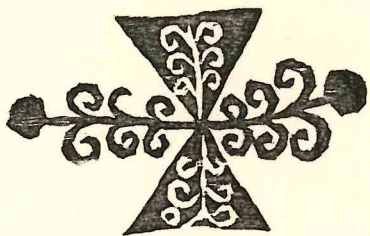
霊御殿

蛇の頭を噛みくだきながら
地上を睥睨してゐた石の怪獣も
地軸ゆるがす艦砲には
抗すべくもなく
王陵を破壊にまかせた

あれから幾年
草茫茫としげる廢墟に
拉しさられた怪獣の

カット木版 高橋輝雄

魂魄のみとどまり
夜ごと
声なき咆哮が草を圧する。



池田千代子

ねがい

いつそ樹になりたいと思う
大きな樹にね 檜のような杉のような
どんなに清々しかろう とあなたは言った
あけくれ病んだ人間のからだばかり診ていて
あなたは嘔吐が出そうだとも言った

口に出さぬもろくの思念は
どろどろと汚れた血になり
凝りかたまつて醜い肉塊となり
あゝいつそ生きたまゝ樹になりたいと思う
そして あなたを想い出す

この血が緑色のそれですっかり洗われ

矮躯が伸びて大空をいき
拡げた両手にいっばいの爽やかな葉をつけた
なら

さらさらとかすかな囁きを
風にのせてあなたに送ろう

受 難

きょうもきちがいがやって来た
勝手に裏口から入りこんで
勝手にしゃべりちらして帰っていった

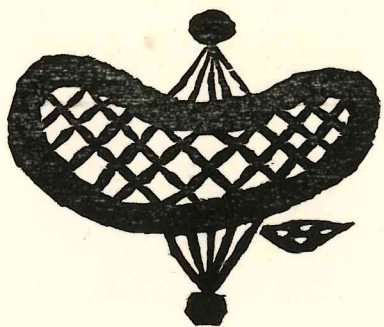
返事はしてもよし
返事をしなくてもよし
言いたい事だけ言って
聞きたい事だけ聞いて帰っていった

むかむかと怒鳴りたくなるのを押えて
きちがいの相手をしなければならぬ愚かさ
誰も構いつけぬきちがいを
人並に遇した祟りか
我が身も亦きちがいに通じるのか

口臭は病菌をとばしはせぬか
そゝり立つ髪の一筋一筋に恨みを纏うのか

思わず後ずさりして逃げるのだが
きちがいは何処へでも追って来る
子らよ
許しておやり きちがいなんだから
平穩な営みが目茶苦茶にひつき廻されても
ゆるしておやり
あの女がお前たちの母さんでなくってよかつ
たと思つて

きょうもきちがいがやって来た
あすもまたやって来るのか
こちらがきちがいになる日まで



井上源一郎

早春の朝に

南の方の鈴鹿山系も
湖の北の比良の峯にも
まだ雪を冠っていた

霜とけのぬかるみを沢にゆけば
浅い水底に

去年からの様の葉が沈み
裸木の技間を透して

早春の空が
うす青く写っていた
それをもちあげるように生える芹を
摘むのだった

お祖父さん——

四十いく年も過去の
この小さな一こまが

あのとき

あなたといただった
芹と豆腐のお汁や 露の藁の味わいで
ほのほのと甦えるのです

杳な

山の彼方の白雲のように
しずかな水面の星かげのように
あなたの慈愛の眸ざしが
今朝のお椀の中にかぶのです

行 水

雨がふる

それを浴びて

一きわ声をはりあげて唄う

蛙たちよ

慈雨だとよろこぶが

而し

おまえはしらない

遺伝に作用するという

ストロンチウム九〇とやらを

おまえの子や孫たちが

忍術の藝のように大きくなったり
くた蛇のように長くなったりしたら
おまえはおったまげるであろう

北の方から

南から

雨がふる

神さまよ

(一九五七)

行 水

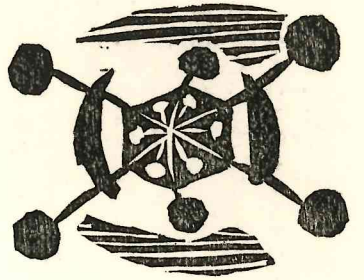
空には十三夜

ゆう顔がほのかな籬のあたりに
馬追虫が啼いていたつけ

わたしは盟のなかの

月の雫を掬っては体を洗ふのだったつけ

(一九二七)



井上多喜三郎

僕の抒情詩

秋風の歌

松の木のとっぺんで秋風が歌っていた
サーカスの馬が首をのばして聴いていた

母の歌

月夜にうたっているのは
はったい粉を摺る石臼でした

秋の雲

洗い場の浅い流れに
つけてある皿

その皿を数えながら
流れてゆく秋の雲でした

御饅頭所蒸求堂

サンポのコースに
古風な饅頭や

今夜も軒端で
酒饅頭をふかしていた

蒸籠がふきだす湯気の中
お月さんもふかされていた

僕の小夜曲

麦の穂の上を
お月さんが歩いていました
はるかなあなたのように

暗い夜

貧しい花ランプをかざしながら
僕は降りてゆく
孤独の谷間へ

はるかな流れのようにひびく Bass

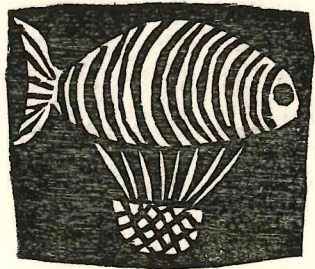
だまつている牛

やさしく奢る火屋ほやでした
牛はせまい牛小屋で
ながい冬を越した
神様のように反齧をしながら

大きなぬれた目に
小さな僕がうつっている

葱

霜の朝は殊に端正ただしい葱でした
esprit が透けてみえる
鮮しい寒暖計のように



猪野健治

石について

おれたちは石を欲求した。
空間を突き刺して立つビル。

シヤベルの石。
ボディいっぱい石。

だがそいつはバラスだ。

おれたちが石になったとき
ビルはがらがらと倒れる

闖入者

その日 羽田空港ロビーには数十人の燕尾
服が紳士を出迎えるために集まっていた。
タラップから下り立った紳士はニコニコし
ながら盛んに握手を求め「諸君の国に栄光が
輝やくように」と繰り返かえした。

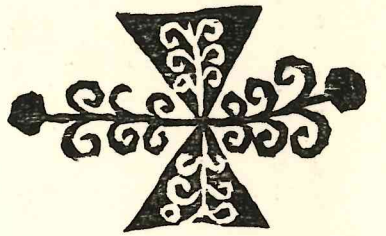
紳士は静かな湖のほとりまで来たとき、ス
テッキを二三度ふった。
すると景気のいい音がして立派な釣竿が飛
び出した。

魚たちは人の好いあの爺さんが、今日もさ
なぎを投げてくれるのを待っていた。

やがて、おびただしい魚の死骸が大型輸送
機で海の彼方へ運ばれはじめた。

風景

草もない大地から



岩崎昭弥

波

みつめてみると波間に風景が写る
ニューズ映画で見たジャングル地帯だ
部隊は炎熱と闘ひつゝ行軍する
見なれぬ獣達があはたゞしく迷惑ふ
朝日が鈴鹿山脈を昇る頃には
母が無事を願って合掌する
今日も出札口で忙しい彼女に
恋人が死んだらどうするかと言って
隣で友がからかってゐる
ジャングル内で白兵戦が展開される
門出の誓が脳裏をはなれない

聖壕を蹴って最初に突撃だ！
だが 硝煙が消去してしまふと
神になつてゐる

部隊が凱旋するのに俺が還らない
朝夕決つて母が駅頭に立つ
彼女はある日わが家を訪ね
思はず泣崩れるだらう そして――

海は太古のまゝの蒼さでうねつてゐる
仰げば白い雲が静かに天を流れてゐる

―インパール―

塔と人と

薬師寺の塔がうす紫の森の上に 立つてゐた
枯れた草むらのなかに 土筆がのぞいてゐる
風はうら寒く 陽もまだ弱弱しかった

黙つてすわつてゐた あの日 あの時
あなたは掌を弄び 眼をそれに落してゐた
陽がさし 陽がかげり 陽がさしてゐた

弥勒仏のやうな睫毛が 開いて

立ちあがつたとき 塔の姿がまぶしかった
可憐な土筆の頭も 押しつぶされてゐた

あゝ あの日から四年半
おぼえてゐたら もう一度帰りたいが
(しかしあなたはもう僕を愛してゐない)
記憶を空にかいて 僕は静かにそれを消す
たゞ

姿かはらぬ塔だけが 今も美しく立つてゐる

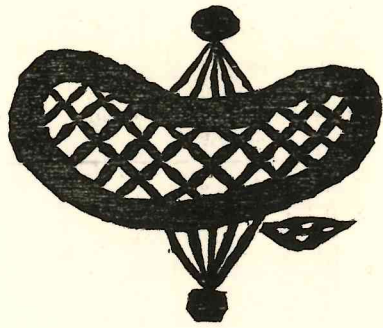
うたぎ

童話の中で恋をした
うさぎの年の君と僕

すゝきの上に浮かび出た
月の世界で もちを搦く

出来た御鏡まんなかに
ほゝ杖ついて耳たれて

「君の夫」と僕はひひ
「あなたの妻」と君いった



岩崎寿雄

色彩の相違

(或ル河童ニ対スル訊問)

皿の中に
溢れるばかりのイデオロギーがあるそうだが
よごれた甲羅に
釣竿担いだお前達の行進には
ワメク ハシヤグだけの喜びで
入道雲が雨雲に変わつて
吾々の上をのさばるさまに似ている
しかし又
皿の中が
煮え切つた時のお前達の歴史には
川瀬と闘つた話が記されてあるが
傷ついた無事の民と

同志の始末は如何にした

皿の破れた奴は

食糧にしたとか歴史にあるけれども

まさかビタミンBにもCにもならなかつたらう

皿の中の

皿の中の

イデオロギーが水平測定器に化した今

水銀だけでも

目盛りの外へ出しやり給え

苦しむ学者も悦ぶに違いない

(詩集巫山戯た人生より)

私は山を征服した

山はゆるやかなカーヴを画いて
純白の衣を
そよと巻きあげる
かんぼくは
きびしい自然にさからつて地表をはい
けい谷は
雪ひざしをかけて雲間にかくれる
私は山を征服している
山は動こうともしない
雪面の足駄は
カタコトと音をたて、

谷間に垂直に伸びる

遙かな風景に春が顔をのぞかせている

準備完了、滑降開始……

急激な勾配に入ると

私の体は

上下左右に大きくゆれて

シユプールが白煙をのこして突ッ走る

かんぼくは

私の脚間に消え去り

風切る頬に風景が飛び散る

小高いふくらみをジャンプし

やわらかい処女雪をけてつて

雪肌につける落書が

スピードをのせて山を駆けめぐる

夢の境地に山を忘れ

スピードに酔つて

シユプールは谷底へと流れ行く

ふと

スピード感から投げ出された私は

山が静かに動いてるのに気付いた

汗にぬれた五体を

山頂にむけて

私は山を征服した、と叫んでみた

真昼の太陽がまぶしく照りつけていた

ふと

スピード感から投げ出された私は

山が静かに動いてるのに気付いた

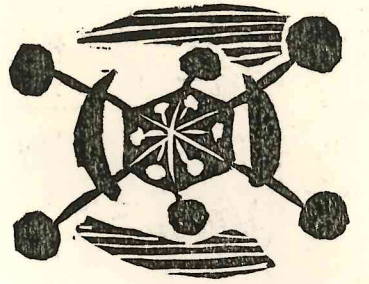
汗にぬれた五体を

山頂にむけて

私は山を征服した、と叫んでみた

真昼の太陽がまぶしく照りつけていた

(詩集梧葉テキスト九号より)



宇田良子

月と河童と

河童は成仏しました
月の細い晩
池の面は光りました
私はその河童をしってゐます
いつか古杉の根元で
まっかなあつい本をひらいてゐた
ロイドの河童でした
其の晩 池の端には
青いドロ／＼の足跡が残ってゐました
水かきのためもありました

でも河童は死んでしまったのです
誰も知らない間に
只お月さまと木の葉が
サワ／＼と野辺のおくりをしました

影

私は
あなたの事を知りたい
それなのに
誰もおしへてくれない
私には
あなたと呼ぶ影はないのに
常に
私の背後にはあなたがあるといふ
すれば
あなたは
何処かのすみに
じーっとかくれてゐるのであらうか
若しもあなたが
あの山の上の崖の縁に立ってゐるとしたら
私はそのもとに走り行って

限りない詩を歌ふであらう
私にあなたは存しない
それなのに
常にあなたは
私の後に立ってゐるといふ

夜

もやが流れる
古風な町が包まれる
誰か近づいて来る
私は軒下に身をかがめる
足音は私の前を素通りする
後をもやが消して行く
そして私も歩いて行く
誰も一人／＼の存在をしらない
しらない心安さが私を誘ふ
何もかも
深いもやの中に包まれる。



大西作平

国立療養所

天然色スライドの
アウシニヴィツを思い出した。
旧日本陸軍医療団の
国立療養所は
縮れた
雑草が青い。
春雷が
山峡の雲のなかからつつ走る。
安普請の
木造平屋建の病棟に
鉄条網はないが

脱兎のように真剣に
逃げ出してゆけるのは
死んだ奴の魂だけだ。

× × ×

実験用家兎の耳を
つりあげる。
——軽くなったな
インターン上りはつぶやいて
注射器をつきさした。

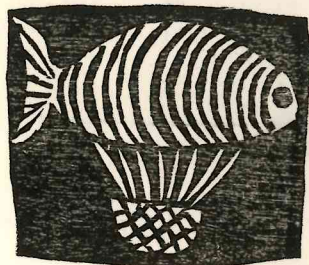
寝まき姿のままの
患者が二三人取りまいてみている。
——君たちの犠牲だ
インターン上りはふりむいた。
患者たちはどっと笑う。
アウシニヴィツの
俘虜たちの笑いだ。

電気工夫

俺達の立てた電柱だ。
何米位ある？
十五米。

ずいぶん高い。のぼるのか。
昇柱器でコツコツ。
寒いか。
寒い。
君は何を考える？
冬の海のようにだ。
風が荒れてきたではないか。
一本の胴綱が俺達を支えている。
曲芸だね。
そうでもないさ。

目がくらむだろう。
腹がべこべこだ。
高いからさ。
夕やみの町がつき上げる。
みんなが見ているぞ。
大丈夫だ。
三三〇〇ボルト。活きたままだ。
死ぬだろう。
三三〇〇ボルトを焼酎につけるさ。
死なないのか。
死なない。
絶対死なない。



大野新

死の背後から

羽をむしられると
胴体は巨大な陰囊のようだ
淫らな首はひらめく出刃でぶつりと断つ
血はしたたるままにさかさにかける

鶏をつぶしながら ふと
人間にしか予想されないこの死が心に泌みた
蛙や蛇を即座なイメージでころしたまえ
なまじろい腹に
さぞなみのようなけいれんがはしるだろう
蝶は標本箱で
鯛は魚拓で

デコラティブな死をよそおうではないか

疲れて目をとじると

どんな生きものでもぼくの臉のうらでたやす

く死ぬ

ふみつぶされた甲虫の漿液が早天でからびた

り

魚の血のように冷えるものが白い陶器のうえ

を走ったりする

さらに疲れて目をとじると

ぼくの目をうらがわからひらく手にであう

またたきもなくぼくの死を見おえる

あのひやかな目にであう

ある確証

死ははじまったが

あなたのくぼんだ臉のうらに

海はひろがらなかった

指さきのけいれんは

空にはひびかなかった

ただあなたは

かぎられた寝台のはばを

水になげこまれたひらたい石のように

浮力にとまどいながら

かぎりなくおちていった

砂糖水をかきまぜるように

すこし重たい

そんなしびれが

あなたの内側では急に軽くなる

そして

あの透明な凝滞が

すこしずつ速度をまして

搬はれてゆく

ある地点から

ふいにあなたはいない

けれど

執拗に

遠くへ歩いていったエネルギーが

かすかに私の内部に灯をともし

もはやふかく頭をたれて去るばかりだ

吸取紙のように

まぎれた死をまたひとつ呑んだ

この白壁の個室から

積った雪は地面から浮き出た様に踊っている

冷やかな私の頬に凍りついた雪の結晶を

星たちは愛の光で溶かしてしまふ

尚も私を燃え立たせながら

抗議

僕は 捨てられた 生れたての 猫だ

両手 両足を使って

近くになんか ありもしない

母親の乳房を まさぐっている

空虚しさと 不条理の中で

誰も教えて呉れない 僕の道を

誰も生きなかつた 僕の生を

必死になって 求め 生きようと もがく

暗闇の中の明るい光は暴力だ

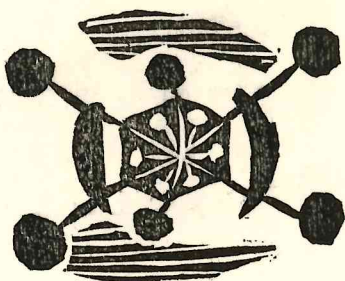
どうか光を照らさないで呉れ給え

僕にはまさぐる手足があるのだから

大いなる母に

あなたの豊かなる乳房から

わたしは限りなき可能性の乳をのみ



大原謙三

二十世紀の獅子

母親は子供を谷に蹴落した

子供には訳がわからなかった
とにかく這いあがらなくては

と 覚つかない手足に全身の力を集めて

崖にとっついてみるのだが

登るなんてことは容易じやない

やっひとりとのぼりした

と 思うと足もとの岩が

いきなり ガラ ガラ ガラ

と 崩れて

すんでのところでぶつぶぶされる
なんとか逃れてほっとしたのだが

冬の夜

白いススの様な雪を

さきほどまで降らせていた空が

果しない深淵と澄み渡って

きらめく星屑を数限りなく降らせている

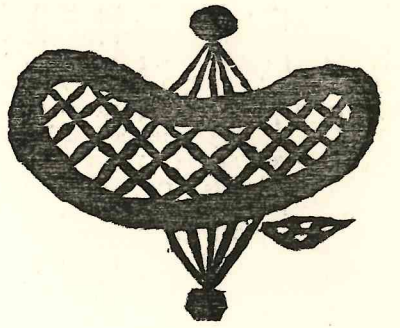
石の屋根も土蔵の壁も黒い土の底までも

わけなく通りぬけて星屑は降って来る

眼を瞑っても閉め出すことは不可能だ

まぶたの裏で星屑はダイヤモンドと光を放つ

総てのものが深く深く宝石の矢を射込まれて
耐え難い感情の沸き立ちに震えている



尾形圭一

夜の海

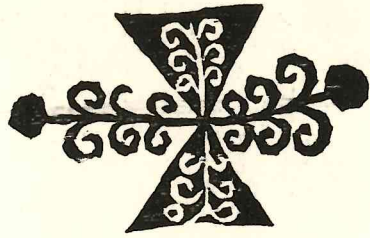
果しないどよんだ夜の海の底深く
 ボツンと黒い瞳が生じた
 黒い瞳は
 次第にその瞳を拡げるかと思う間に
 密航者である浮浪者を
 低い雲もろとも呑み込んだ
 海は母親になり得なかった女の涙という
 吾子はうぶ声をあげず
 女のうち股をけらす
 乳はスイトピーのような口からでなく
 二時の海に虚しく吸われた
 その女の流す涙が海になったという

海へ帰りたいノスタルジャーを背負って
 その海からヴィナスが生れた
 それ故か
 ヴィナスの瞳には
 すべてを呑み込む海があった
 その海の前で
 すべての着物をとり去り
 静かに身を浸し始めた時
 私は
 岸辺にたゞよう浮浪者の溺死体をみた

片羽の蛾

蛾は
 ライターの火に
 引誘せられて飛び込んだ
 すぐその火は消えたが
 何か微かな臭が残った
 一昔前のこと
 いっそ身も心も焼けてしまえばよかったが
 片羽だけの私は
 今も飛び去れないでいる

別れ
 汽車が動き始めると
 私の前歯が一本
 ホームから線路へと
 小さな音を立て、ころげ落ちた
 何の理由もなく突然抜け落ちた歯
 欠けた歯の間から
 冷たい風が容赦なく入ってきて
 そしてしみた
 私はすっかり口を閉じて
 みんながみえなくなるまで手を振った
 その間
 舌が欠けた歯をまさぐるのを
 どうしても止めることが出来なかった



奥地憲二

ある情景

先程から僕は河尻の橋にいる
 橋の上には
 臨海学舎に來ている
 女子高校生達と
 赤子をおんぶした女
 誰もくれなずむ
 日本海を眺めている

ワンピースが赤く染る
 陸風が河の面を亘っていく
 ワンピースの赤さは
 丘の臨海学舎や

散在する家々に移る

沖には今しがた出て行った
 墨魚の釣り舟のランプが
 静かにおろされた夜の帷の中で
 ほのかな光を発し始める
 こゝにいるのは僕とその女
 彼女はじつと海を見つめている
 夫が漁に出ているのであろうか
 僕も沖を眺める

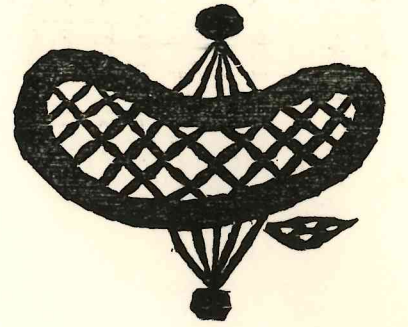
陸風は沖に温い風を送る
 点在する小さなランプの光

ある日の日本海で

或る日の海は
 白い牙も見せず
 けだるい呼吸をしている

時には
 渚で小さな牙をちらつかせるが
 それはあくびの時に見せる牙
 空には

あくびが水母のように浮きながら
 拡っていく
 その中に
 ジェット機が流れ込む



河村純一

神話

庭の木々は
太陽の光を
吸ふては噴き出してゐた
あなたはスフィンクスのやうに
腹ばひ
私は祭司の如く
つゝ立ってゐた
あなたの貧しいお尻の上の
アプノルムにとび出した
尾軀骨

私はその小さな骨をも
ふくめて
あなたをかぎりなく
愛してゐた

手術室

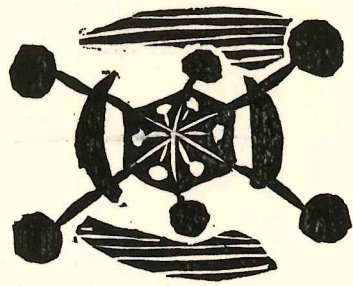
明るいけれど
質素な電燈の光
その光の圏の中に
トマトのやうにつややかな
桃色の横行結腸と胃
晴やかなオレンジ色の花糸は
その間を繞る脂肪組織
血にぬれたガーゼの
タンポンは
無愛想な絞纏
十字軍の騎士のやうに
銀色にかがやく
鉤やメスや鉗子
この世ならぬ色彩が

陽炎を吐いてゐる。
「思った通りですよ。
膀胱壊死だ。
酒は強いらしいですね」
と友人の外科医が呟く。

ときどき呻きはするが
内臓をさらけ出した
Kさんは好物の晩酌を忘れてゐるだらう。
私は脈をとって見る。
心臓は日常通り――
大穴のあいた腹には
冷淡な無関心さだ

蒼海にかこまれた岩山で
はらわたを裏返しにして
日に干してゐる生きものが
あったとか。

とにかく明るいけれど
質素な電燈の光の下で
いきいきと生命の炎をあげてゐるのは
病める内臓であつて
Kさんではない。



北川清次郎

足

歩いて来た
何ともなしに歩いて来た
迂り転げそうな
曲りくねった田圃道
泥田の中では
蛭に吸われながら
何のために歩いたか
たゞ
僕にぶつた神経に
解っていることは
いつかはこの足も
動かなくなるということだ

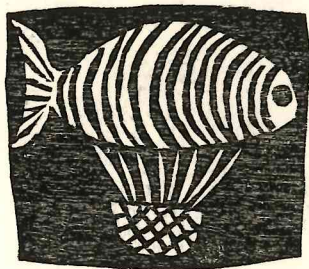
いや
それさえ忘れてゐるかも知れない

墓標

熊笹が茂り
茶碗が割れている捨てやりの
墓標の下で
句作にさゝけた筆が朽ちてゆく
生前ひねくれたこの俳人の
風化しつゝある喉仏からは
不遇をかこつ声は
聞えない
盆が来ても
訪れる人もない
熊笹は
墓掃除に刈り倒されるだけで
慰める術を知らない
墓参りの
ついでながら
頭から
水でもかけて置こう

尼寺

静かな荒神山の麓
五六段の石畳を上ると
古びた庵室
山行があると
陽当りのよい廊下で
弁当を食べた
愛想のよい尼僧が
熱いお茶を出してくれた
汚濁の世から
忘れられたこの寺を
唯一の誇りとして暮している尼僧には
たまさか 大勢が来て
弁当をつかってくれるのも
楽しみの一つであるようだった
百日紅が
花をつけ始めると
彼女も
淡い夢を思い出すかも解らない



木村三千子

夜の谷間

駅の時計が八時を指していた。
かつての夜の青い恋が
この構図の中から生れたにしても
今では何の関係もない時間なのだ。

流れに逆う事も考えずせかせかと歩む。
電車の去ったホームを過ぎて地下道へ
こゝでは
曲った背筋もスカートの上も気にならず
コンクリート壁のしみとよんだ空気、
立派な旅行靴の中味に
汚れた下着しか期待しなくなった。

霧が流れる。
私は顔を上げて街へ出て行く。
誰の影も薄く適当にぼかされ
独りずつで歩いている。
星を失った空にもう驚きはしない
冷えきった隕石の確かさを
まっすぐに見つめるのだ。

秋の恋

落葉が枯草が耳もとで音を立てた。
生活が消え
稀薄になった空気の中
前後のない時間が激しく呼吸する。

目をあけると
山峡の空を低く速く
雲が流れ、雲が流れた。

魚 臭

わざと消さずにおいたスタンドの灯が
そっけない横顔を見せていた。

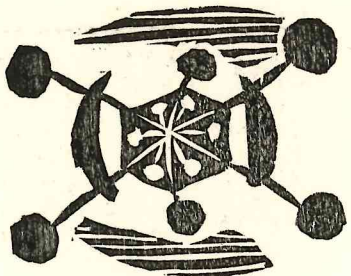
感覚を使い果した肉体
飢えていた心に渴き加っただけだった。

不安定な虚脱に脳髓は焦点を失い、
髪の毛のカラミついた額に
海鳴りがおし寄せてくる。
現実には背を向けた筈の女の目が
宿の天井にかけられた
クモの巣を見つめていた。

ある商人のおしゃべり

つんとすましたお嬢さんにはピンクの下着を
マニキュアのおねえさんには黒いスリッパを
一腕がれる時の効果の計算まではよけいだが
夢のある下着をまとう時の
期待を持った喜びを
感じさせるのが私の仕事。

一円二円に目角を立てる買物カゴは大嫌い
これからの商売は
人生の色彩にどん窓な女性達を相手にしてい
かなくちや。
バストパットの手ざわりや
ウイークパンティの色合にも
不感症な位置に立ち
もっともらしい顔付きでカップサイズを計っ
ている。



久古 尚

旗はいつまで 黒いのであろうか

夜は隧道であるのか
湖はいつなくなつたのか
飛び出した眼球はモミガラをくつつけて
汽罐車の火照が痛い
空洞をハイキン達の歓声が埋めると
湖底の水流は北へ廻る
その夜俺は娼婦に出会つた
ヒロイズムは安価になり果て、
一塊の土がうめいた
フエアリ達は今夜もあの森で踊っているか
湖底にしばしフルートが鳴つた
臍臓は苦しんでいたが

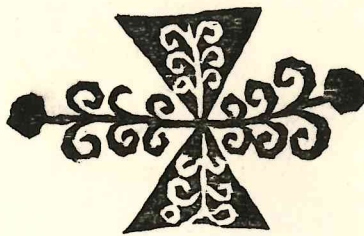
俺達の主人公は酒を飲んでダブルベットに
寝ていた
脳下垂体の前葉は用がなくなつたのか
俺の手足はやがて冷くなる
湖のしつぽの河が青い
山が追つたとみるとなだれこんで
ランプが本を焼いてしまった
俺はいらいらの嘔吐をおさえながら
ネオンの赤を喰ってしまった
誰かがしきりと俺の耳許で囁く
直腸は隧道への道を行ってしまったのか
コーヒーセットが舗道にわれた
横たわる俺の死骸
港の倉庫は壁が厚いのか
燐光を放つ死骸の性器
モヤモヤの霧は列島より深い
俺はゆっくりと起き上つて
隧道の出口を探し始める

うつつらと

夕闇が這い寄る

こゝからは びわ湖が見える
壁が破れたまゝの二階
どの柱も歪んで
窓は それぞれ 一寸づつ

上か下かが 空けており
立てば頭の届きそうな
低い天井に
雨の漏りか
しみの地図が描かれ
私は風邪をひいて
天井のしみを数えながら
今日 一日を 寝て暮した
……………あ あの てっぺんに
レーダー基地があるんやなあ……………
稜線が 逆光線の中で
くつきりと セピア色の空に 泛び
湖は 夕風の中で しづもろうとし
うつつらと這い寄る
夕闇の中で
まだ来ない 電灯を
待ちわびながら
私は 又
天井の しみを 数え直す
丹念に……………



小林英俊

南国古調

次女を鹿兒島の姉宅に送る

志布志の海で

明日の幸福を信ずる故に
親と子は遠く別れることにしました

早や春も逝くらしい南国の海辺を
落武者のやうに話す元気もなく歩きました

「達者であつておくれ……」

起重機で石の心を吊り上げた志布志の街よ

くもりがちな瞳の空は

やがて小雨となるのでした

さあれ嘆かず

坂を登ると広い麦畑
南国の春は青く青く燃えてゐた

「ほう、もうこんな穂が出てゐるんだね」
話しかけながら微笑んだが……

セーラ服のあどけない顔に突当って
僕は、ハッと戸惑ってしまった

「いつまでも小供ぢやありませんよ」
その明るい顔が笑つてゐるんだ

さうかなあ
さうだなあ
僕は季節の外に投げ出されてゐる自分を見た。

偶

畳の上で逆立ちしてゐる

この人生の素晴らしさ
どうせ嘘ばかりの世の中だ
オレはペロリ舌を出して嗤つた

僕の詩

冷えたコーヒより
ひと片のパンでありたい

饒舌の花火であるより
孤独な心の灯火であれ

恋のなさを知らぬひとに
あのほのかな哀歎が何んで解らう

わが胸の映像を綴る愚直を嗤ふ人へ
ばくはただ微笑で応へるばかりだ

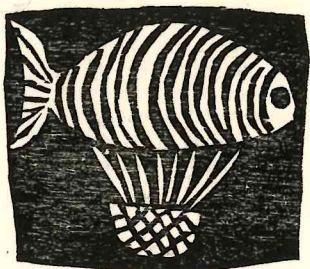
闘病抄

手洗鉢を覗く雄鶏は
早春の青空をつゝいてゐた

沓脱石に揃へてあるスリッパにも
妻のやさしい心が光つてゐる

牛蒡のやうな足を撫でながら
僕は どうしてでも

早く健康を取戻さねばならぬと想ふのだ



佐藤寿恵子

六月の比叡の朝

朝早く宿院の二階の
ガラス戸をあけると

湖の上から
深い樹林を渡ってきた
冷たいこころよい風が

さつとはいって来た
朝日がすぎの木のこずえに

ちかちかと輝いている
はるか下に矢走の湖畔が

ぼうとかすんで
絵のように見える

湖岸からつき出た
いかりのような形のえりも見える

湖面は朝日を浴びて

こがね色のレコードのように
光っている

対岸の三上山が
乳色のもやの上にこんもりと
浮き上がっている

きのうの組合の総会の
あの白熱化した空気は今

夢のように消えてあとかたもない
きょうも又、協議会で
はげしく燃え上がることだろう

あゝ！
この天地の静寂と悠久！
深いしじまを破って

放送の讃歌が流れてきた

白浜

「朝からこれで四へんめですにや」
私の前の観光バスの運転手が
つかれた声でつぶやく

路傍に芽をふく浜木綿
白い砂青い松

白い砂青い松

ゆったりとしたおだやかな海
海に突き出た泥板岩脈の形と色

水族館の泡立つ水槽の中の
グロテスクなトラウツボ、クロナマコ
コンクリート池に悠々と泳ぐ巨大な海亀

ガラスをへだて、海女の実演
海女の白い肢体がくねくねおどる
植物園の青々とした南国の木々

三段壁の下の吸い込まれそうな深い淵
千層敷の白っぽい岩の上に立って
はるかなる太平洋を望み見る

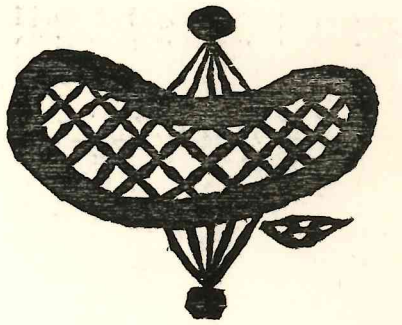
白い波が見え出した
峠の休憩所の牛乳の胃にしみるあたゝかさ
私は三月の白浜を味わっている

内裏雛

床の間に飾られた内裏雛
着物は古び台座ははげているが
ろうたけた静かなそのお顔

内裏雛は知っている
祖母や母のそして私の
女の歴史を

戦争と平和の繰り返しを



沢 柳 太 郎

あ の と き

あ の と き わたしは河へ出ていった
ひとりゴムながを鳴らしていった
おおきなくすの樹のしたで
呼びとめたこともたち
わたしは少しわらいながらとおりました
かくれんぼのおに
おまえたちのゆめのまんなかへ
ろうそくのようにしんと立ってよよか
ったが

あ の と き わたしはさきはらの狭い路を入っ
ていった
ひとりゴムながを鳴らしはいていった

ふっさりとした堤防ののぼりぐちで
出あったむすめ
わたしは少しわらいながらゆきちがった
おまえの
なめらかな挨拶にそうてかえってもよか
ったが

あ の と き わたしをむかかせていたひとつの
もの
あ の と き わたしにつながらねばならなかつ
た河
あ の と き わたしのなかへながれこんでいた
魚

生

窓をとじると
海は祭りのようにひいていった
ここにさびしげな
わたしのにくだいたいがゆれのこる
わたしじしんをみとどけるために
むねからつまさきへ
しんみりと澄んでゆくときをまっ
ている
ゆれやまぬながいいちにちであつ
た

あかるい陽がながれている
このときもわたしのどこからか
ひかりはよれてきて
灯芯のようにちりちりそっている
のであろうか
天井へくちびるだけをしほり
せわしない灯をともしたり消したりしている

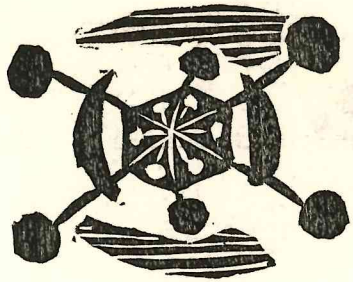
ミミツチイ悲しみの詩抄

うらぎりの女に

五年 おれは河をわたる蛇であった
いま 胸のあたりから水がひいてゆき
荒れた河床によじれる繩を思え

おれに

ひとの流れのなかをゆくとき ゆきの下をく
ぐるように おれはどんどん軽くなり ほと
んど足が浮いてくる このままゆくえふめい
になりたいたいな そう思つて角をまがると や
つ／＼とばかりに ういんどうから出てくるお
れのくらしい顔と出会ってしまった



清 水 秀 暢

湖 上 の 雪

湖に 深雪ふり
湖に 深雪ふり
積むとしもなし
凍むとしもなし
水の上
水の上

湖に 波浪ゆれ
湖に 波浪ゆれ
止むとしもなし
立つとしもなし
雪の音
雪の音

湖に 深雪ふり
湖に 深雪ふり
息むとしもなし
波の声

涌くとしもなし 波の声

湖に 波浪ゆれ
湖に 波浪ゆれ
浮くとしもなし
待つとしもなし
雪の花
雪の花

湖に 深雪ふり
湖に 深雪ふり
白葉のかげ空し
白葉の波紋なし
水の面
水の面

湖に 波浪ゆれ
湖に 波浪ゆれ

(長浜にて)

ジイド忌

二月十九日ジイド忌に

草庵の
窓を開け
牙え返る
月光下
東天に
伊吹を望む
午前二時

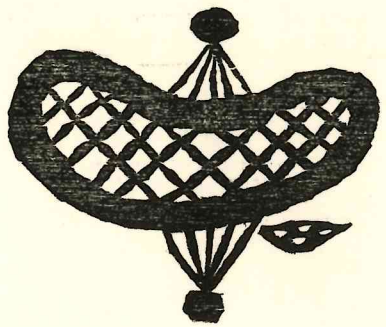
深沈と
巨木無き
山の尾根

ジイド忌と
夜半を起き
全集の
並らぶ

背文字に
面影に
想は馳す
深沈と
巨木亡き
ふらんす詞界

月光は
キエヴェルヴィルの
壑域の
土照らし
七洋に
星水る
深沈と
東邦に
一読者あり
君を弔ふ

(浅井にて)



杉本長夫

忘却

私はあなたと会った
そして無窮の時を過した
碧空に近い
崩れた城壁のかけで。

秋も深まった夜
私はあなたに触れた。
それから二人して
すべてを学んだ

湖が河の動きを
音もなく飲みこむように。

あれから二十年

私の黝い皮膚は
果実のような
あの驚きを忘れている。

コケットリイ

同じ車に乗り合せて
膝つき合せているのだが
女は男に
充実した時間を投げる。
その溢れ落ちそうな微笑みに
男は意味を探ろうとはしない。
同じ道を行く

風と小鳥のように
瞳だけが連れ合っている。
男は
しばし翼を休めたまゝで
女の
瞳の奥にひろがる

不思議な原始林を展望する。

小 道

私はいちどあの小道を歩いてみたい。
旅の涯にふと眺めただけの風景だが
あの道は何処を通り

何処にいくのか私は知らない。
ぼうぼうとした枯野を切って
遠い雑木林に続く道、
さらに向うの

灰色の空に消える道、
なにもかもがつくろいのない
自然な姿なので

土のなかにとり残された
根っ子のような心には
予感にふるえる風景だった。
いつか私はいちどだけ
あの小道を歩きたいと思う。

松原にて

カリブソ娘のみだれ髪が
白いベンチに絡まっている。

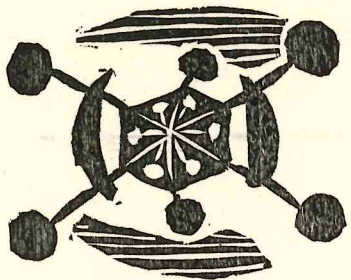
黄昏

湖がロンロン燃えたと

ヨットが

湖面のチャックを外していく。

松並木が一斉に伸びあがる。



鈴木敏

村

むらにはあめがふっていました
あめはわらぶきのやねをぬらしました
あめはまどがらすをぬらしていました
わらやねのしたでとしおいたをんなが
四十しよくのでんとうをめのところまでさげ
て

はりのめめずに糸をとおしていました
おさげのこどもがとこのなから
糸をおすそのしぐさをじっとみていました
あめはまどがらすをぬらしていました
とこのまえに ひらいたノートとえんぴつが
あり

ノートにはえいごがよこにならんでかかれて

いました

あめはわらぶきのやねをぬらしました
あめのなかで むらはこんないくつかの灯を
ともしていました

牛

俺は知っている
酒ぶねを踏む婦人たちの側で
仲間達の牽いた石臼の重さを
石臼の周りを
繰返しくりかえし廻ることで
俺達は自分を確かめた

陽が落ちると
俺は呑み込んだ憎悪や悲哀を
唾液とともに
吐き出し咬みしめてみるのだが
みなおなじ秣草の味がする
俺の眸がたえず濡れているのは
その舌の鈍さからなのだ

俺の腹は飽腹する
だがいつも俺の口は飢えている
それから あの残忍な夜が始まる

脚を折り俺の全てを俯臥させながら
たとえば薬屋根の下の僅かな灯のように
俺は内腑のなかで覚醒する

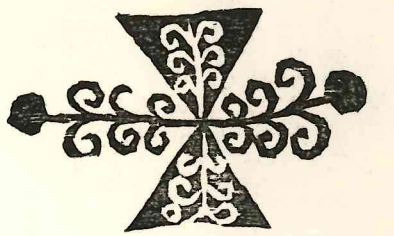
KNOB

りのりうむのゆかのうえにおちたてぶくろ
に だあれもきかず どあがおされどあが
しめられると せかいはなんのぞうきなくも
ようがえをする

どあがおされどあがしめられると しよう
じよのむねのいちでさゝえられたていかつぶ
が おふいすをすいへいにあるこうとするの
だが ここではていぶるのうえのバラのはな
があかすぎる

ふたたび どあがおされどあがしめられる
とひとがとおすぎる どあがひらかれどあ
がしめられるとひとがとおすぎる どあが
おされどあがおとたくくしめられると ひと
はとおりすぎている！

よる どあはかたくとぎされたまゝなのだ
がおきているどああのひとつの め



川 鱒

鈴木寅藏

研ぎすましたヤスをかざして
冷えまさる秋の川淵へと
素裸になって私は泳いで行く。

水中鏡から見る透明な川底の生態——
あゝ、手も届かない深みに
洗い磨かれて理想に光る岩石がある。

ふと岩石の横に倒れている黒いもの影、
それは鯉でも鯰でもない様だ。
—— 一体なんであろう。——

そうだ 自らの影ではないか……

朝日に投じられて水中をう暗い影には
痛ましい自己の足跡が重なっていた。

川底に動かない岩石は
冷徹の水流に抗しきびしい自律を保っている。

いま その岩石に被いかぶさって来たのは
私が射捕うとした妖しい銀鱗の川鱒だ。

よし今だ。私は全身こめてヤスを打込もう
もしか このヤスがはずれたら
自分の暗い影に突き刺さってくれよと……

獵人日記

雪は山を圧した。僕は雪の重量をかき除け一
条の溪谷を伝って歩いた。腹に炸烈する弾薬
を抱き、錆びた銃身に家計をぶら下げ乍ら。
雪嶺は僕の胸先に息詰る程迫った。犬は絶え
ず僕の前に居た。あの溪流の薄水を踏み越え
て、僕は犬をたより犬は臭覚をたよった。

僕はその犬の行動に銃を執った。銃声は烈し
い羽撃の瞬刻を捕えた。松の雪がどっと散り
犬は溪を蹴って戻って来た。血が雪にこぼれ

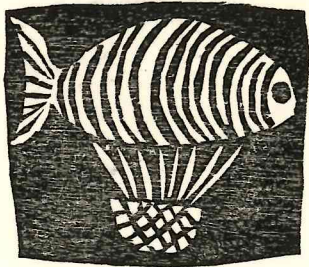
た。僕はぬくい山鳥を網袋に押込んで、まる
で事も無い様に口笛で犬を促して歩いた。

路はつきず溪は山に添い山は山岳を重ねた。
僕の日は其の重累を踏破せねばならない。
雪の反射は眼に痛く、僕は冷寒に抗して漸く
山頂に辿り着いた。

岩の雪を払って腰を下した。そこでパンをか
じった。犬は穢れたパン屑をなめた。やがて
頭上の凍雲はちぎれ麓へ散逸して、青空は僕
の額を研いた。ふと樹の間に光る蒼き湖よ！
水際の岩間に浮ぶ点景。僕は素早く銃身をか
またえた。その瞬時眼底に羽撃くものを錯覚し
た。しかし安全装置が引金を阻止していた。

僕の胸にはひそかに湖心の如き美しい平安が
来た。静寥に二羽の水鳥が、虹を架けて水を
浴びている。僕は銃を肩にはっと救われた想
いで山を降り出した。あの山頂の湖を胸の乾
板に抱き乍ら。

その蒼き湖を今まで気付かなかった永い空白
の歳月をおしみつゝ。僕は犬を後に雪溪のス
ロープを家路へと急いだ。網袋の山鳥はす
でに冷え切っていた。



田井中 弘

山脈暮景

時雨であった。
蜘蛛の糸をくぐってはこぼれる山脈の時雨で
あった。

木の上に木が重なり、雨雲が折り重なって時
雨は瞬間重たく辺りを圧していた。谷合の淵
瀬に望む傾斜地は時もなく静かである。

いつの頃から僕さえ押し黙って眸も開こうとし
ない。するとどこからかしのび寄って来た、
菱形の唇の女が、かしましく僕をあざけり、
さんざと踏みにじるのだった。

樹々の繁みのわずかなきれ目を透かして、湖
を行く汽笛がほそぼそと尾を曳いていた。
ひえびえとする冷氣よりも、余程時雨が気に

雄松崎秋景

かつて雄松崎の白汀に満ち溢れた人波のよう
に
さゞめきは比良から和やかな秋風をもたらし
かつて白汀に哭きぬれた乙女のように
折柄 時雨がひた／＼と岸をうった

茫漠と湖はうねり
蕭条と空は澄み

楊梅の滝から流れ落ちる花崗岩の川砂に
荒れ狂う台風は鳴り
飛沫はさびれたヴァンガローの木々を
かるがると捲く

或日は華やかな衣裳のように

雄松の隆々たる梢にかゝり

或日はあくどい売春婦のように

襦袢となつて波打際に棄てられていた

杳から聞えていた地引網の綱引く声が

早まった秋景に

から／＼と干からびて空に消え

おちこちの窪みから

病み疲れた秋蠅がわずかそれを追った

そうして幾日か

或いはそれよりずっと以前

私はたゞ一人光を失った砂浜に横たわり

うつ／＼な眸をひらいて

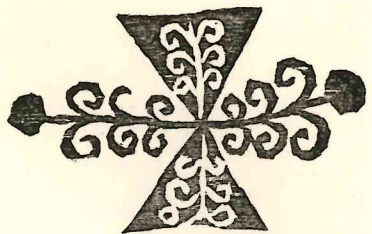
見るともなく辺りのうちに

過ぎ去った ある思いを抱いて

湖を流れる霧のように

きりもなく

はてもなく
落日の 雄松崎秋景にひたっていた



高橋輝雄

デッサン

花？花だな お父さん 花があるいてる ど
こへ行くんだらう？ こんな夜更けに ばら
いろにかがやいて花たちがあるいてる ど
こへ行くんだらう？ 窓の向うの 作曲家F
さんのお家のもっと向うの あの道を ぼく
は知っている 作曲家Fさんが生きていたと
きには作曲家Fさんは朝も昼も夕方も夜更け
にもこつこつあるいていた道だ ぼくもこつ
こつあるいてみた お父さんもこつこつある
いていたな パンをかじりながら パンには
花の匂いがしみて お父さんが貧乏をわすれ
たような顔をしていた そばで作曲家Fさん
がうれしそうに花をながめていたな あの道

を花たちがあるいてる こんな夜更けに花
はどこへ行くんだらう 花たち ひっこしす
るんちがうかな ひっこししたらつまらな
いぞ ああひとつひとつの花がばらいろにか
がやいている こんな夜更けに 花があるい
ている 花たちはどこへ行くんだらう ああ
だめだ お父さん ぼくのうちの花もみん
な行ってしまふ ぼくも行く あのを歩
いて行こう 花たちといっしょに ばらいろ
にかがやいて ぼくも行ってしまふぞ

私のそばを汽車が通りすぎた

汽車にはかぶと虫ときりぎりすがのつていた

かぶと虫ときりぎりす ばんざい

私のむすこのノオトには

幸福なプランがぎっしりつまっていた

幸福なプランよ

幸福なプランが

私のそばを通りすぎた

私のむすこをのせて

むすこよ

かぶと虫よ

きりぎりすよ

幸福な汽車よ

みんなばんざい

ばんざい

沙漠は雨にしっとり濡れて
指で絵をかくのがたいへんゆかいだ
私がりボンのような花をかくと
私のむすこはヘリコプターのようなとんぼを
かいた
私のむすこは目をかがやかせて
とんぼにのつて
とんでいった
沙漠の向うへ
戦争で失った靴を
さがしに

いろいろな雲たち

農夫のRさんは土地をもっていない

これはどうしたというのだ

どうも不合理だというのだ

Rさんは不合理ということばが好きだ

好きは好きだが

Rさんは昨日のこりの田をみんな売払って

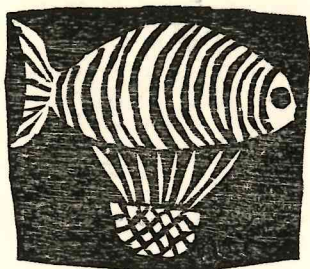
これからのみにでかけるところだ

むすこむすめはとうのむかし家を出た

家の中はさっぱりして寒いので

Rさんは一ぱいので

まったくおちぶれた



武田豊

夜の声

蝙蝠のような奴だ
昼の声をきかずに
夜の声を
それも暗闇の声を
地球の裏側の声を

その声で

君の子を 君の孫を あなたの恋人を

また 死の旅へ誘おうとするのだ

君は

あなたは

その美しい 華やかな 仮面の夜の声に

その扉を開けてはならない
その扉の向こうは神も無い 死の路に続いて
いるのだ

その扉を開けた 男は女は
すぐ麻薬にかかったように
夜の声の毒酒に酔ってしまふ

こ奴は蝙蝠のような奴だ

君を君の子を君の孫を あなたのあなたの夫
を
美しい けんらんな声で呼んでいる

ホト ホト その扉を叩いて

たとえば 清三さんと呼ぶ

こんな風な声を聞いてはならない

その夜の声を 昼でない夜の声を

自殺者

白い息を吐いて 首をかきしげ

鳥のように集って来た人等は

ボタンや靴や帽子などを寄せて
とある

一枚の人間地図を引いていた

バアッとはじけて

たまらなく
木犀の花のように咲いたか
その肉塊の酸漿した匂いが
僕の咽喉ちんこを覗きに来る

スリコ木に似た腕に

冷めたい生活の風が吹き

ちよろつと閃めかせた素足の裏に

(ビルマの風か——)

それともボルネオの風だらうか吹いていた

お お 輪切りにされた年輪よ

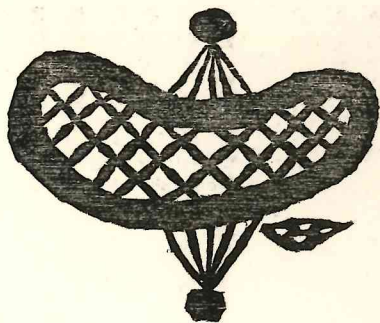
ぼーんと蹴上げた

ヒユマニテの石ころに

今！太陽があわてて空へ登り

その下を はるかに駆けている

ペンギンのように転務が二人



田中克己

泪

湖の岸
糸杉の林の下で
僕はおまへを抱いて永久をちかった
そのときおまへの頬を泪がつつた
「なぜおまへは泣いた」
僕がたづねるとおまへは
「わからない」と答へた
のちの日の悲しさを予知してか
永久のちかひをうそと思つたか
それとも子供のやうなうれしさでか
僕にもわからないせ

たゞおまへの泣いたことだけは
いまもわすれない。

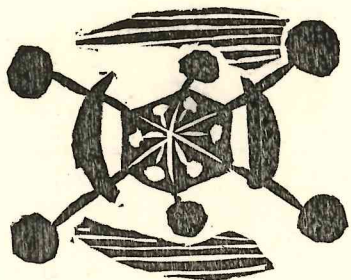
藪の中の彼

丘の向ふ、中仙道の向ふの
藪の中に彼はゐて
時々僕の住んでゐる町に来て
女房のゐるのもかまはず風流な話をする
僕の今までもたなかつた種類の友だちだと
女房はおどろいてゐる

丘の向ふ、中仙道の向ふの
藪の中へ彼を訪ねる
僕は自転車にのれないので
この道がなか／＼遠い
彼は奥さんのゐるところで風流な話をする
僕は教師なのでしかめっ面できいてゐる
さて夕方になつた——僕は暇を告げる
藪をぬけ中仙道をよぎり
丘の道来るとひとりの娘に会ふ
僕はギョツとする、この人気がないところで
彼の話の中の人物のやうに
僕がこの娘に何かしはしないかと心配して。

詩人

東に伊吹と伊香の山々——雪でまっ白だ
西は荒神山までの麦畑に気違ひ天氣の陽炎が
立ってゐる
主人は詩人で奥さんは人形造り
そこで詩の話を一時間半
——ちよつと税金の話がまじつたがこれはい
たし方なし
やがてとり出された一枚の写真
この国のこの時間に見る詩人朔太郎は
戦争のまへ新宿の喫茶店で
若かつたわたしに詩を説き恋愛を説いたとき
と
全く同じ服装をし同じ表情でわたしをみつめ
てゐる
朔太郎の写真を掲げる家を
このまちで発見したことがうれしいといつて
主人と奥さんとにわたしは別れを告げた。



谷川文子

夜長

沈黙が
黒い影のようにしのびよる
母の影も
祖母の影も
私に重なっている
つくろいものに埋れているわたしに
おびただしい影が
来ては重なる
えんまこおろぎが
ピエロのようにまかり出る

疲れ

稲の葉先が
面腫れた私の顔を刺す 土用田の中
父よ
私には私の心を見開いてくれる人がない

昨日も
今日も
どろにまみれ 汗にまみれ
炎熱の下を
這いまわっている

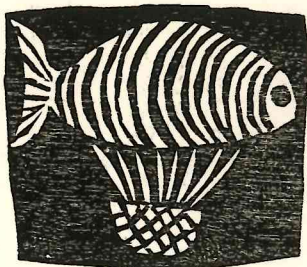
父よ
今日ばかりは あなたの答が聞きたい

庶民の墓

墓地であつたと云う畑を
水田にするために
毎日掘り返しているのだが
拾いあげると

深更

ぼろぼろと碎け去る
酸化した一厘銭
何の抵抗もないことが
ものたりなくもあり
すがすがしくもある
深い眠りにおちてしまえば
こどもも一つの個体である
食器にふれる犬の鎖
宇宙の果てをつっぱしる彗星の
ほのじろい おびえ
ここはたしかに銀河の一部だ
生れない前からつづいてゐる



戸塚定雄

ひととき

かなしい ことが おおすぎる
ひとときの光が けしてくるけれど
ふこおの ことが おおすぎる
ひとときの光が けしてくれるけど

ひとときを
おもいつめては
ならぬこと。

坐つてる

たった一人静かに
時の外に坐つてる
おばあさんと 一つの人形
人形の目のうるむ時
おばあさんは泣いている
子供のようにおばあさんが若やく時
人形の胸はときめく
謎の世界に坐つてる。

落ち込んだ谷底
絶壁の暗黒に囲まれ
五月の風も空の青さも
此処までは達かない
幽かな一条の星の光り
それさえ時に消える。

怖れ

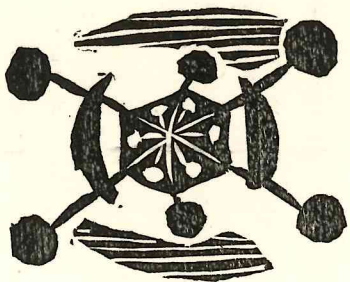
譏が風となって雲を追って
言葉が雲となって迷い流れる
隻手の声が風を止めた時
雲の姿は水に映った。

谷底

耐えられぬ痛みを果てを
疲れてまどろむ憩いの一時
のしかかる運命の重石の下に
声も立て得ない
沈黙の比重は金の無限大。

大きな牡丹のように開いた 白い海月
暗くも明るくもない もやの中を漂い
海峡のような路をゆく、

真夜中を 煌々と点った灯
陰影のないメスの下に 沈黙が凝結する
よちよちと一つの魂が 天に昇ってゆく
星一つ落ちて海へ消えた。



中川いっじ

夜の鉄路

闇にも そしてうとい視力にも
鈍く光る一すじの鉄路。
ときには夜になる商用での帰り
町を少し外れたこの鉄路を越えるまえに
自転車からおり タバコに火を点けるのが
この頃の僕の習慣になっている。
遠くに赤いシグナルが一個
その向うではいつも何か重い音がしている
工場の夜業か 貨車の入れ替えなのか。
人通りもまれなこのあたり
喫うタバコの呆けた火に
僕の呼吸の確かさが
恐しいほど はっきり みえる。

今は昔 いわゆる正義の犠牲の骨箱が

肉身に抱かれて何度もすぎたところ
瘦せ細り でも生きて帰った空から
粉雪が泌みこんでいたところ

かす／＼の光景は過去の故に暗いのか
それらはみんな 形のみ変えて
何か尾を曳き何か持て余しながら断続する。

南は町の灯 北は田圃の闇
明暗をつなぐ鉄路のこの位置は
僕らが生きている現在か
どちらを向いても どちらからも

何か重々しい音が押し上ってくる
何を造っているのだろうか
何を入れ替えているのだろうか
それらは僕をゆさぶる 棘の鋭さで。

青葉繁る古都をひとりさまよう人の
さびしい希みからか
いつ絶えるとも知れぬ闇屋たちの
おびえた眼からか
ふたゝび いわゆる 天に代りての
戦車部隊の轟音からか

それらはみんな沈んだ叫びに似て
僕自身の 果せない夢も ひっそりと
あの赤いシグナルのあたりで
はた と行きまどう。
僕は短かくなったタバコを投げる

すきとおっている

それは一人の生命のように
鉄路のこの位置のように
一瞬 孤を描く 呆けた灯りを発する
このとき僕は最も確かな
冷たい僕を見つけてしまう。

わたしはぶらりと歩きます
ところどころ芒が光っている郊外だ
野分はからむ追憶のように前になり後になる。
生の死の くりかえされるあの部屋はあけ放
たれ 薄黄色のカーテンがしばらくはられて裾だけ
大きくゆれている 呼べばかすかに応えよう
とするのは その部分だけだ
あの部屋もわたしのようすきとおっている
どこまでもすきとおって吹流しのようになっ
ている もとより何もなかった空洞の部屋だ
ったのだ 少しばかり夢のようなものがあっ
たとしても どこか遠い国でのあわい記憶に
すぎないのだ。
ながい鉄橋を電車がとれる
その音まで すきとおって ちりぢりになる
荒涼とした河沿いのこの道の果てに
何があるというのだろうか
わたしは一本の芒を折って手に持つと
野分のなかをぶらりと歩きます。



中村光樹

ひめくり

坐ったまゝ手の届く白壁の距離に
部厚いカレンダーが
小雀を描いた花瓶に隣ってかけられ
未だ見ぬ月日の夢を包んでいる

哀しく病む日があることも
美しく癒ゆる日があることも

凡ては巡り来る三六五日の数字の中に
秘められている

土曜の青さと日曜の赤さを
週毎にはさんで

(友よ) いつも偕にある心を握りしめ
力一杯素直に生き抜こうじやないか

”日々吉日”と

”心に太陽を唇に歌を”と

比良山と琵琶湖の見える縁側に
筆太に貼りつけた四角い部屋に

あした、勤めの口笛を吹きならし
ゆうべ、疲れの靴下を脱ぎ揃え

一日の生活の系譜を日記に描き上げ

思い出す限りの友の横顔に幸福を合掌し
(友よ) 明日への唇を一枚つつはぎとって
黒髪をシーツに拵げ

その髪の辺にふくよかな掌を置き並べ

平和の いびきを

星座に点じようじやないか

無題 (五章)

い考えの腕を机に組むと

イメージは壁の如く拡がり

イメージはレールのように伸びる

湖の波紋の如く、ジャックの豆の木の様
に聞いて呉れるから話すのです

耳はいつも本当の事を聴いてくれるのに

あの白い糸切歯の覗く唇から

美しい嘘が吐き出されるのです

は未来は平面から立体になるのか知ら

^{1/3}は未知数なのか知ら

雪は桜を見たか知ら

桜は雪を見たか知ら

に左の指が温いのに右の指が冷たい朝がある

一文にもならぬへボ詩を

締切りぎりぎりに書きあげたからだらう

ほ斧が白い孤を画いて空気と光線を切りさいた

バリ！同時に木の割れる音が聞かれた

その音は朝の空気を遠くへ震わせ乍ら

波紋

水は季節をその儘呑んでいる

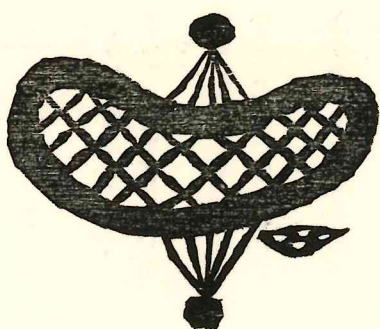
雲のたたずまい 山の黙禱 樹林の体温

そして 膝の上の白い手袋を描いて

子らの投げ込んだ石の波紋が

向い側から泳いでくる

魚紋が魚紋を招いている



西川 勇

馬上盃

— 胡風よ

夥しい野兎のむれと飢餓のはやさと
草原をあゆむつかれた人馬が
とても *neglige* な蒙古包を横切る
貝殻紐もなぐさみはてて
なんとぶざまな旅路のはてか

きのう朱色の門がたつ癩の都で革命よ
きよう牛の皮一枚のチベット訛
わが鞍敷もわすれはて
なんとみじめな旅路のはてか

鶏頭いろした漠北の子よ

地平の鴉共おっぱらうにはまだ陽がはやい
かの旅人に今一度ゆくべき道があるのなら
そっと耳打ちしてやんな

あの(色)うすき

血痕の

野草の(道)を

まこと気のあらっぱい漠北の子よ
千年からびた盃はないか水仙いろした麴酒は
あればかの旅人に今一度波々と注いでやんな
かの旅人は竭きかた
かの旅人は馬上高々
ぐいっと一盞

われたはずめのうちがわを

またこつこつと駈けてもゆこう

あの(一睡)の

夕陽の(道)を

飢餓の塔

どんな空腹で 軒を飛びかう燕が
巢のない巢に餌をはこんだか——

お城のひしの実のように黒い
のどもとを通らぬトゲの——

エーテルもない深夜
メスを砥ぐ男の——
紡まれる白いまゆから

ひとつかみ掠め去る女の——

ああ これらの飢餓の塔

それはウゴリーノ伯のようだった

まず息子を殺す そして

孫の肉から食べた

それは猛禽類よりやさしかったか

鮫類よりもやさしかったか——

みずからの塔をくいのぼる

白蟻のはばたきよりも——

いや そうではなかった

そうでなくなろうとする——

歳月の

流れよ——

僕は再び犯罪者の陰惨なよろこびで

そこから儲けを引きだそうとする——

思いかえし

なお想いみるがよい——

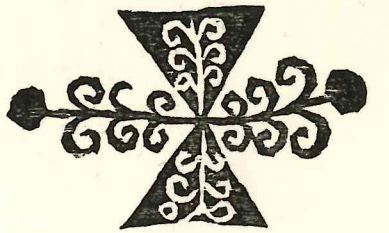
どんな空腹で 満洲大豆よ

お前は空しく麻袋からこぼれおちていったの

か——

どんな空腹で 甘藷づるよ

お前は空しく一葉一葉もぎとられていったの
か——



錦織白羊

虫の歌

灯を消し
椽側に一人坐しながら
耳を澄ますと

そこには
限られた庭はなく
闇が天にまで続いている

たゞ虫の声――
闇が鳴いているようだ

深く聴いているうちに

闇の中に
ポツンと灯が点いた

私の心の中かも知れない

荷物

上野信越線の軽井沢列車内で
発車を待っていると

貨物列車が入ってきた

荷物が 無雑作に次々と投げ出され
その度に 涼しさがおろされてくる

一つ一つ点検しては

伝票に鉄筆を走らせている 駅員たち
腰を伸ばす暇も惜しいように

荷物を手押し車に積んでいる 仲仕たち

バラバラ転げたジャガイモを

荷物の破れに入れている 駅員もいる
ゆるんだ縄を締め直している 人もいる

目の前の車にボンと積まれたボール紙の荷物
表には筆太に、尾上梅幸様と書かれ

差出人は新潟の人

荷物がすっかり運ばれていった後
プラットホームの一部分に
冷凍のしずくで濡れた跡が
影のように残っていた

ひとみ

ぱちりひらいたみどりごのひとみは
ゆりかごの中で空を見ている

わたしたちがそっとそばによつたのに

美しい角度でわたしたちを見た

わたしもつままうつつっている

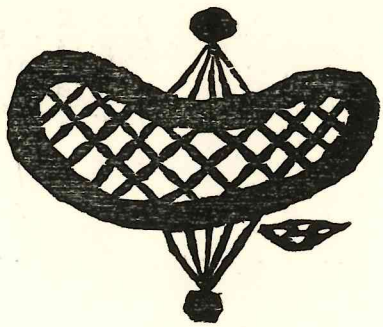
と、と、と舌を鳴らしてあやすと

ひとみが笑った

正邪を見ぬくひとみ

まことの愛を知るひとみ

今日もゆりかごのみどりごは
周囲に笑みをふりまいている



野田理一

実現こそすべてである

我々は遭遇する

ひそかに日記を訂正する者の心理に（おお雁
の群が空の道を急ぐ）

あらゆる地上的破壊に（それは廢墟の手によ
る窓からの救助ではないのか）

そして搬び手もなく動いてゆくものに！（牢
獄への道を）

ヴァルブのつまった詩人の群の放送局からの
脱出に

我々は遭遇する

古い写真と傷ついた時計の前の単純な心に
罐詰の空罐をはいた子供らが馳廻る舗道の明
りに

食塩の不足を告げる女の背後で一枚の新聞を

買い

真横からの鋭い光を浴びてそれを読み

街角を横切る路傍の通行者の歌に我々は聞く

「切符でない切符のための数時間は徒
労である

荷物の上の荷物、荷物の下の乗客は
泥の偽装をした列車への夥しい滞貨で

ある

時間は辛うじて最後の一人の踵に於て
である

……荷物の上へであり中へである

すべては一頁の動きに於てである」と
すべては一頁の動きに於てである、それを呼

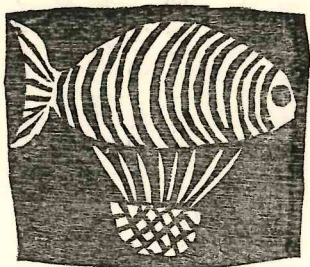
び給へ

我々は分裂し遭遇しついに到達する

「何を」は打消され「どのようにして」は逃
亡の後姿を鏡の中に捕えられてゐる

壁の上の地図は読まない

1945. 9.



久 沢 俊 子

赤い月

私の胸には
赤い月が宿っていた
少しづつ欠けていく
意識の中で
私はしっかりと月を抱いた
羞じらいのび泣きながら
丸い乳房は天を向く
いけませんわ もう午前二時です
星があんなにもピッシリと重なり合
って青い光
燐のようなあの光も何時かは流れる

のですね

私は窓からの妖気に濡れながら
震える祈りの言葉を挙げた
あの赤い輪は私の冠なのです
あの冠が消えていくのを
私は身じろぎもしないでみつめるの
です
神様 私を不安と期待の底に押し込
めたのは誰でしょう

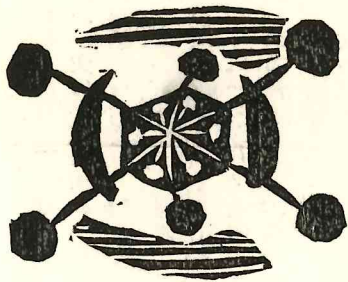
ガラス戸に
体をすり寄せて
店の中を見ると
少女が立っている
一ぱいの涙をためて
冷めたい笑顔

細い首に
腕を廻して
あれだ
あれが私だ
あれが私の愛だ

花の店

何時かは明けるであろう
暗黒の中で
白い戦慄はうづくまり
ゆれ動く生命を
宇宙に托して
私の乳房は天を向く
めらめら めら
めらめら めら
ゆれ動く
麻のような炎

思わず叫ぶと
少女の持つ
茨の為に
私の体は
充血した
その夜
めらめら めろと
バラの花は
ほころびては散った



藤 井 陽 子

ホワイトシャツ

雲にのせた私の小荷物
雲は流れてヨーロッパへ行ってしまった
日本の田舎の空をゆっくりと過ぎ
やがて見えなくなった時
雲に手をのばしてとり上げる大男を想った
彼のシャツ ズボン その大きな靴
死滅後までも夢想するのは勝手だ

劇 場

人間は藁のような包を残して灰となり
旋風にあおられながら落ちていく
何万年か かかって
金星に運ばれたとしても
堆積するだけ
蟻の巣を築いて貯蔵している人間だから
その前に土埃で窒息するだろう

靴

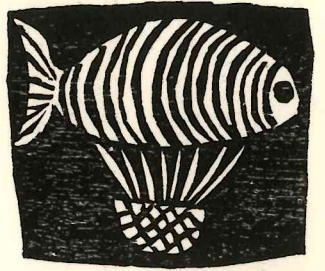
一枚きりの五〇年の切符を費った
階段の靴音が追い越してゆくのだ
雲間を突き抜けて聳える摩天楼
のろろと這い上ってくる者を
掃き捨ててしまおう
エレベーターは摩天楼の尖端から上の方へ
繫っている
登ってゆく靴音々々

手に入場券を持っていた
閻魔様が神様がが手渡して下さった切符には
五〇年と書いてあった
円天井の場内はざわめいていた
満員で一幕上る毎に人が替っていた
何時の間にか隣に友達が腰掛けていて
私達は滑稽な場面になると笑った
気の利いたセリフがあると満足した

乱立する摩天楼を
上り下りしている人間だった
靴底は擦り減り
鉤が奇妙な音を立てて上り下りする
下りてゆく乱れた靴音
街路に立つ時 靴は眠ってしまった

人 間

夜半の催物は果てそうに無く喧噪に沸き返り
倦怠を覚えて劇場を出た



藤野一雄

冬眠

枯れ葉は重なる上に重なる
谷の向ふの山脈は
琥珀いろの日差しに暮れ残る。
そこに、昨日まで僕はゐた。
畏から受けた傷の痛みが
光の記憶を消えさり難いものにする。
あすこは、あんなに美しかったのだらうか。
背中を丸めてうづくまりながら、
訪づれる薄明の裡に、僕はまだ想ってる。
目が覚めたら、躑躅の若芽にかけろふがたつ

春になったら僕は蘇みがへる。
そんな、自然への信仰はもうよきう。

夜の河

傾むいた木立の間から
河原の瀬音が洩れて来る
静かな夜の耳鳴りのやうに
人々の独白が其処へ集つて
ざわめきながら流れてゐるのか。
知ってる人の
話し声が混ってるやうで
あれは 誰だったかと
さう想ふのだが。
僕を、えとらんぜのやうに
夜が隔だてる。
旅に出る時、
駅のざわめきが、
なつかしく遠ざかるやうに、
河は僕から離れて行く。
夜の河は、
人の心を深くつつんで、
流れてゐるに 違ひない。

蟹

みなそこに
ほの若い光が漂よふてゐます、
貝の背中に夢を見てゐるやうです、
魚たちも巖かげに睡ったやうです、
今宵は潮もひそやかに流れてゐます。
ふと 昆布の林がゆらりとゆれて
その影がなだらかな砂丘に縞を作りました。
小さな水玉のむれが真珠の環になって
煙のやうに立ち昇りました。
それっきり もとのしじまにかへって、
はてもなく
ほの若い光が漂よふてゐます。
そんな夜です、
蟹が恋をして瘦せるのは。



冬木好

山椒魚

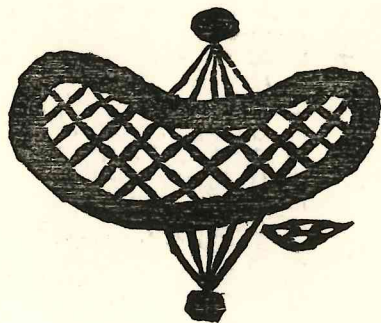
秋立つまえ
溪谷の岩穴から私はひとり抜け出した
人がいないのを確めて岸に這い上った
その時 樹は還すべきものを地に還していた
空はどんなにすべてを捨てることは出来ても
もう この一枚の枯葉さえ奪えない
私はやわらかい枯葉を探して歩く
私の脚は自らの重みさえ支えきれない
いったいこの内部にいま私は何を持って
のだらう
私の孕んだ充ち足りた卵は

変身

確かに山椒魚ではない
枯葉の上に自らを投げ出しているのは
一個の鉾物に過ぎない
追いつめられて 遠い日のすべてを
この脆い石灰質に託したのは誰だったか
そして何処へ帰っていったか
眼窩を閉じることはない 歩むことはない
還るべき方向へ流れ去ってゆく
河からさえ 解放されたいまだ

枯葉

これから何処へなどと聞くな
小さな息をして顎骨がかたかたと音をたてると
鉾物は碎け落ちた。
樹もない 抱擁もない 神もないからこそ
空は 海のように熟れてゆくこのわたしのす
べてを奪いつづけることができ あんなにき
れいに一つの季節を過すことができた
わたしの道は遠かった いま わたしは疲
れている それなのに汗ばんだわたしの重さ
を 空はその手を存分ひろげて支えようとは
しない いや 支えるにはいまの空はあまり
にも小さすぎる
最後の果実に わたしのなかの果てしない
ものは流れ わたしはそれにたわわな成熟を
急がせながら 若木を育て四つの季節を過さ
せることがどんなに難しいことを知った
そしてわたしは いま 重さを大地へ還すだ
けなのだ
わたしは落ちる 落ちる 急がずにそっと
落ちる けれど あれはいつたい何なのだろ
うか 落ちてゆくわたしの背に 軽やかに身
をのせて落ちて来るのは！



村 ひさし

死者とそして

音のない口笛

つまずくと

地底から無数の手がのびて私をとらえ
つまずいてたおれると

地底から真黒い無数の手がのび

私をほおむる弔旗をかかけ

墓穴をほる

じりっじりっと墓穴をほる

私から時間は遮断され

私を石臼のように引回していた時間は

すでに真黒い無数の手で遮断され

無風以上の無感覚まで

表面を無関係な方向へ流れる
今朝

私を目覚めさせた太陽もすでになく
無数の手によってすでになく

なんのかかわりも持たない闇のなかで

私の柩はしずむ

私の柩はしずむ

やがて柩が完全にしずむと入口はとぎされ

真黒い手はしだいにきえて

通りぬけられない行止りで私が

静けさを取りもどしはじめた時

貴女は真黒い手によって建られた墓標の前に

小さな火をともし山を下って行くだろう

ぬれた石のおもみをいだいて

そして貴女にも私にもえんどおいざわめきの

なかですぎさって行った私の

みじめな後姿を思い涙ぐむだろう

だが私はもういない

みわたせる風景のどこにも

あの墓標の下にも

広い宇宙のどこにも私はいない

へだたり以上の遠さを残して

貴女のなかにさえも私はいない

さえさった私しかない

時間は

すべてが消えさる方へ流れているのだろうが
貴女やかつての私を取巻いていた人人のなか
にすむ私さえも

湖底から浮かび上がるあわぶくのように

かすかな音とわずかなひろがりを残す事を

くりかえしながら

しだいに重さをうしない

かるさもきはくになり

ついになんでもなくなるのだ

だが貴女はきづくだろう

ふとつまずき

あの無数の手にとらえられた時に

口笛をふいて貴女をよんだ

あのころのように

私が貴女をよんでいる事に

そしてかけだすだろう

夜道で私の口笛にむかった

あのころのように

たえず とたえず 私がふきならしている

音のない口笛に向って



八木 祐彦

湖

じっと、見つめてゐるのだが

ぼくにきみを見ることは

湖面の色合ひを紅に見るやうなものだ。

いつも、聞き耳をたてゝゐても

きみの言葉を聞きとることは

湖の底に冬眠してゐる魚の吐息を

激しい氷雨のなかで聞くやうなものだ。

いっそう、ぼくの五体が、

このまゝ湖底に沈み

木枯しのなかで、かたく浮かんでゐる

あの水道塔に吸ひ上げられて

夜よりも暗い土管の中をぬけてゆく。

やがて、杉並木と芝生におほはれた

表面を無関係な方向へ流れる

今朝

私を目覚めさせた太陽もすでになく

無数の手によってすでになく

なんのかかわりも持たない闇のなかで

私の柩はしずむ

私の柩はしずむ

やがて柩が完全にしずむと入口はとぎされ

真黒い手はしだいにきえて

通りぬけられない行止りで私が

静けさを取りもどしはじめた時

貴女は真黒い手によって建られた墓標の前に

小さな火をともし山を下って行くだろう

ぬれた石のおもみをいだいて

そして貴女にも私にもえんどおいざわめきの

なかですぎさって行った私の

みじめな後姿を思い涙ぐむだろう

だが私はもういない

みわたせる風景のどこにも

あの墓標の下にも

広い宇宙のどこにも私はいない

へだたり以上の遠さを残して

貴女のなかにさえも私はいない

さえさった私しかない

水源地で浄化されて

街々に通じる、細い鉄管を通るために

微かに、それは微かにきざまれて

まざれもない透明の飲料水となって

きみの体のいたるところへ入ってゆく。

その時、ぼくは始めて見るだらう、

誰も見ることの出来なかつたきみの中の湖を、

その時、ぼくは始めて聞くだらう、

きみの中の湖の底に冬眠してゐる魚の吐息を、

そして、始めてぼくは悟るだらう、

はつきりと、きみがぼくのものになったのだ

と。

秋の旅

— 知多半島にて —

傷ついたひとつの矜持は旅に出た。

南に面した半島での私の思念は鈍い漁船の汽

笛に包まれた。

遠く置き忘れて来てゐたあの「刻」たちの囁

き。

私は落日にひとつの人影が音もなく私の心の

階段を下りて行くのを認めた。

夕映えの海に漁船の群が帰って来る。

海辺に佇む私のそばに何時からなのか、又、

別の人影が立ってゐる。

河口

夕暮れは終つたが深い夜はまだ来なかつた。

湖心の向ふから冷たい風が河口を逆上した、

うろこ状のさざなみが幾重にも折り重なって

河を逆上らうとしてはまた途中で消えた。

流れは湖へそゝがずに風に乗り逆流した、

いや、逆流してゐるのではなかつた、

河底の水はやはり湖の見えない所へ流れてゐ

るのだらう。

流れようとして風にさえぎられてゐた、

しかし、それは流れてゐるのだった、

あしやよしきりが風に乗りさざなみと一語に

僕となびいてゐるだけだった。

旅のをわり

船は岸壁を離れた。

十日間の記憶が小さな頭の中で渦を巻く。

汗ばんだ腕の中にはつぶれたボンネの果実。

港内のネオンが妖しく波頭に点滅する。

僕は顔を沖に向けて、もっと個性のある、

風雅な果実の香を追つてゐた。

住所録

井伊文子 彦根市松原 千松館
 池田千代子 滋賀県能登川町本町
 井上源一郎 芦屋市親王家町六二一
 (大阪市北区老松町三丁目三マナ料理学校内)
 井上多喜三郎 滋賀県安土町西老蘇
 猪野健治 彦根市安清町乙
 岩崎昭弥 岐阜市近ノ島 島荘内
 岩崎寿雄 米原町大字米原
 宇田良子 彦根市本町
 大西作平 彦根市古沢町
 大野新 滋賀県守山町吉身七区
 大原謙三 岐阜県揖斐郡池田町上八幡
 尾形圭一 彦根市安養寺町 北沢方
 奥地憲二 彦根市伊賀町 三浦方
 河村純一 彦根市一番町
 北川清次郎 彦根市清崎町
 木村三千子 大阪府北区天神橋筋三ノ十五
 久古尚 大津市船頭町六
 小林英俊 彦根市正法寺
 佐藤寿恵子 滋賀県多賀町
 沢柳太郎 滋賀県野洲町三上山出
 清水秀暢 滋賀県東浅井郡浅井町大路

杉本長夫 彦根市中藪町晒山
 鈴木敏 滋賀県坂田郡伊吹村春照
 鈴木寅藏 滋賀県甲西町菩提寺
 田井中弘 滋賀県堅田町伊香立下在地(玉崎 弘)
 高橋輝雄 大津市大石首束
 武田豊 長浜市大手町三二
 田中克己 東京都北区岸町一ノ七 中込アパート
 谷川文子 滋賀県多賀町敏満寺守野
 戸塚定雄 彦根市芹川町 戸塚勝子
 中川いつじ 滋賀県びわ村川道五五五
 中村光樹 滋賀県堅田町真野
 西川勇 滋賀県水口町水口 つたや方
 錦織白羊 近江八幡市板屋町一一
 野田理一 滋賀県日野町日野
 久沢俊子 名古屋市中区和区天白町梅森 光風園内
 藤井陽子 滋賀県水口町田町
 藤野一雄 彦根市四番町
 冬木好 滋賀県守山町石田 (石田好蔵)
 村ひさし 長浜市榎木町九五九(中村 寿)
 八木祐彦 彦根市二番町
 中川郁雄 彦根市安清町甲

後記

「滋賀詩集」は近江詩人会が、毎月第三日曜日に開催している詩人学校の、八十回を記念する意味で、企画されたものであるが、他のグループにおられる詩人も、参加していただいたので、県内在住、又それにつながる詩人のほとんどを網羅して、湖国最初の「滋賀詩集」を刊行出来たことは、まことに欣快とするところである。

詩歴四十年という老齢がいるかとおもうと、詩作一年の新鋭もいるわけで、詩風もそれぞれ異なっているが、詩と共に生きるという真摯な精神にかわりはない。スペースが一頁にかぎられているので、その力量を充分発揮できないのは遺憾であるが、美しく咲き競って、たのしいオーケストラをかなでている。乞う。このなごやかな詩の国に、遊歩されんことを。

編集

井上多喜三郎 杉本長夫
 猪野健治 武田豊
 大野新 中川郁雄
 小林英俊 藤野一雄

昭和三十三年七月三十日印刷
昭和三十三年八月十日発行

三〇〇部限定 定価二〇〇円

編集兼
発行者 近江詩人会

京都市中京区御幸町御池上ル

印刷者 双林プリント

滋賀県長浜市大手町三三

武田方

発行所 近江詩人会